

## 第二十四回

「この收容所に来てから私は眠るのに床へ横になって、両手を組まないでどうしても眠れなくなっていた。

右か左に体を横にしてみても、結局は棺おけに入ったときのように、仰向けになって両手を組まなければ眠れない。この現象は一体なんなのだろう？」

生きているのは形ばかり、中身は魂のない抜け殻で、実は私はすでに「仏」になっているのではないのか？夢などにうなされることはない代わりには、この不思議な現象に人知れず、ずつと気に病んでいた。時折、東京にいる両親、家族のことを思い出すこともあるが、それまただぼんやりとして幻影のように消えてしまう。

その頃は士官も下士官も同じ柵の中にいた。

ニュージラランド兵は、日本兵、特に下士官はなにをするか分からないと恐がり、夜などなにか用事があるときはゲートで話し、柵の中へは決して入って来なかった。

下士官の強硬派は志願兵に多かった。夜、上官のいる士官室へ乗り込んできては、

「このままおめおめと敵の捕虜になっているわけにはいかない。日本はまだ戦争をしているのだ。座して戦局の推移を見守るより、後方部隊として敵を攪乱し敵にひと泡吹かせ、われわれは全員名誉の戦死を遂げよう！」

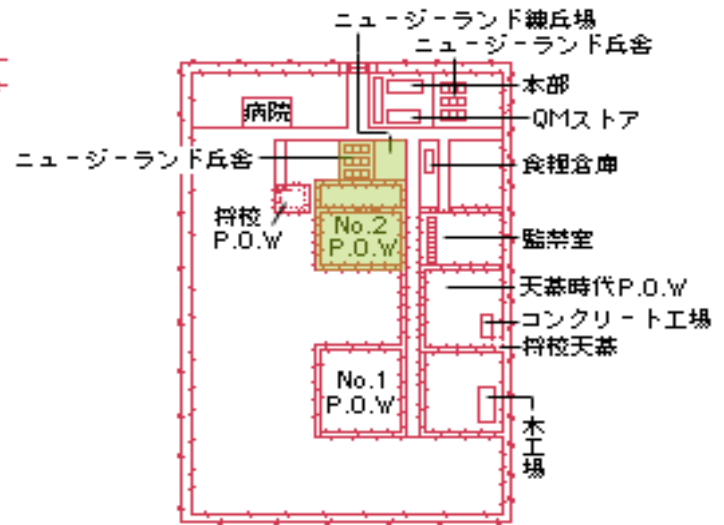
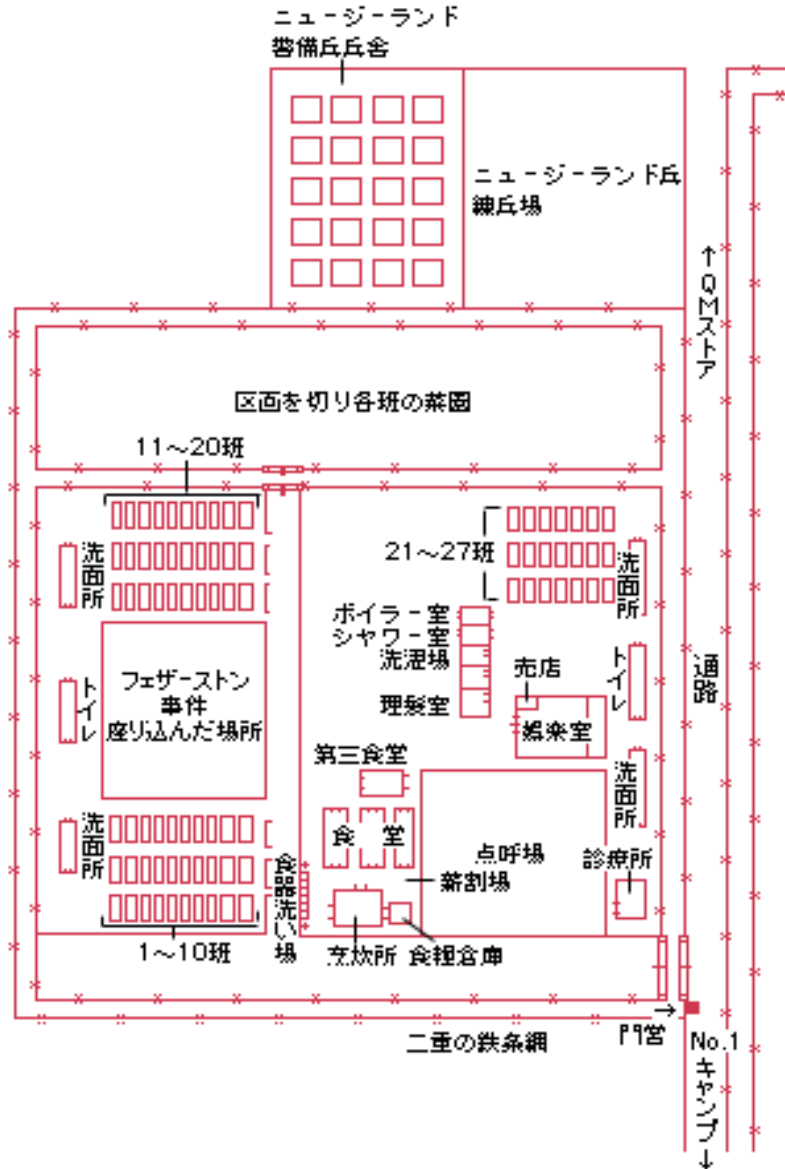
と息巻いていた。この捕虜收容所はどこに弾薬庫があり、どのぐらい武器があるとかを調べ上げ、しきりに暴動を起すそうと士官たちをけしかけていたようだった。

### フェザーストーン捕虜收容所発砲事件

半年ぐらいたって、道を隔てたところへ、木造で間口一間一・八一メートル（奥行き二間ぐら）の三角屋根の犬小屋のようなものが沢山並びはじめた。この建物が、われわれの移る、新しい收容所小屋であった。

フェザーストン捕虜收容所概略図

第2キャンプ (No.2) 拡大概略図

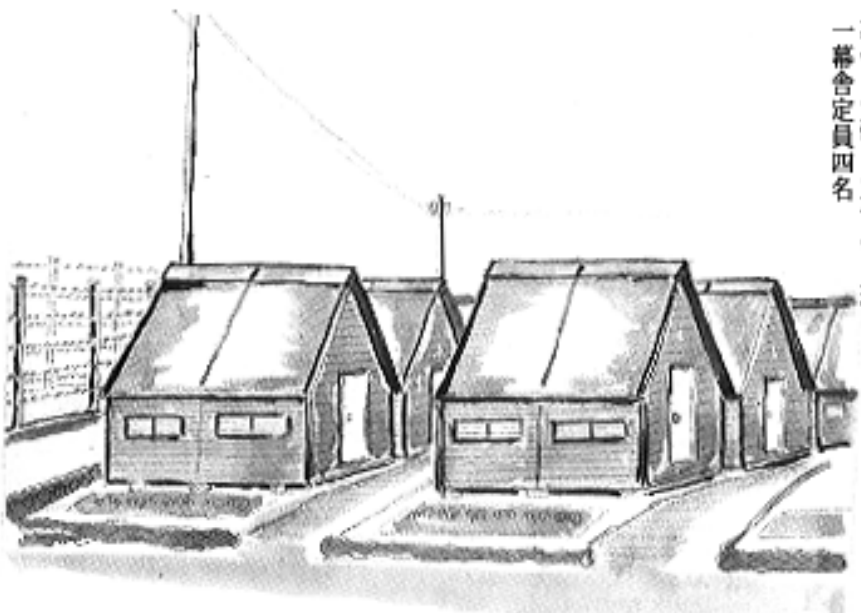


上図 緑色部分を左記に拡大

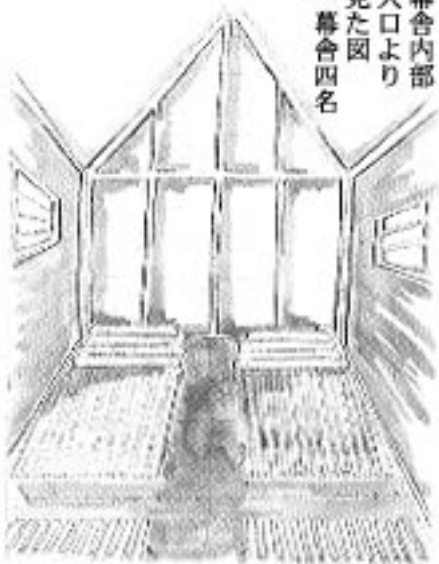
このとき士官七八人と下士官以下と同じ第二キャンプ(收容所をキャンプと呼んだ)内であったが、別柵へ分けて收容されたために、お互いに接触できなくなつて暴動の話はしばらく沙汰やみになつた。

下士官の強硬派に辟易して、士官らがニューゼーランド側へ居場所を別にしてくれと頼んだのではないかと噂された。

フエザーストン捕虜収容所  
幕舎、立割、三箇一ヶ班  
一幕舎定員四名



幕舎内部  
入口より  
見た図  
一幕舎四名



小屋には床板の上にすのこのよう  
なぶとが四つ並んでいた。この上に藁  
布団を敷いて寝るのである。

この三つの小屋の十二人が一個班  
とされ同じ船の仲間同士や、一緒に  
なりたい者同士の希望が入れられて  
班をつくり、班長には下士官がな  
た。小屋は二十五班分並んでいた。

宮川とはグループが別になり、この  
時から別れ別れになつてしまつた。

こづく

次回第二十五回は五月二十五日(火)  
の予定